

本質に迫る授業作り

[単元名] 運動やスポーツの多様性 (中1 体育理論)

(1) 単元設定の趣旨

今の中学生が、30代、40代になったころ、世の中はどうか変化しているだろうか。少子高齢化が進み、AI等の開発は、人の生活(働き方と余暇の過ごし方)を大きく変えていくに違いない。今以上に、余暇の過ごし方が問われると言えるであろう。この時、運動やスポーツが、自分の人生を豊かにしてくれるものとして、人々の選択肢に色濃く入っているべきである。そこに、本単元で取り扱う体育理論「運動やスポーツの多様性」を学ぶ価値が生まれてくると考える。スポーツというものを固定概念で捉えるのではなく、多面的に考え、多様に関わり楽しめるものであると気付くことは、保健体育科の本質である「明るく豊かな生活を営む態度を育てる」ことに直結する。

体育理論のカリキュラムを見ると、中学校第3学年では「文化としてのスポーツの意義」が、高等学校第1学年では、「スポーツの歴史、文化的特性や現代スポーツの特徴」が位置付けられ、中学校ではスポーツをまず「文化」として捉えること、そして、高等学校ではオリンピックムーブメントへの理解を含め、スポーツの歴史や現代スポーツと社会との関係をさらに深く理解する単元が設定されている。また、中学校第1学年では、文化として運動やスポーツを捉えることの「関わり」の幅を広げ、「する」以外に「見る」「支える」「知る」などの多様な関わりも重要であることが示されている。そのことが、高等学校最終学年における「豊かなスポーツライフの設計」において、年代や生活の仕方に応じた運動やスポーツへの多様な関わりを豊かにしていく計画や、そのための環境を考え、整備していく必要性を学ぶことにつながっていく。つまり、体育理論のカリキュラムとしては、**豊かなスポーツライフ**を理解すると共に、設計するという一貫した目標が示されている。

中学生が、長い生涯で運動やスポーツを豊かに実践できるようになるためには、それらの必要性、ライフステージやライフスタイルに応じた運動やスポーツの多様な楽しみ方や学び方を理解することが重要である。本単元では、運動やスポーツは「する」だけのものではなく、観戦などに代表される「見る」、また、大会運営に参加する「支える」など、多様な関わり方があることについて、生徒の身近な経験を通して理解したり、その知識を基にして情報を分析したりできることを目標としている。

生徒には、「体育」というカテゴリーを超えて、広く社会の中における文化としての運動やスポーツの位置付けを構造的に理解し、今後、運動領域における知識や気付きと関連付けながら、豊かなスポーツライフを求める態度の基礎を身に付けてほしいと願い、本単元を設定した。

(2) 教科の本質に迫る授業づくりの工夫

「みんなが豊かなスポーツライフを送るために必要なものは何か」を学習課題に置き、生徒一人一人の実体験に基づく意見を関わらせることで、スポーツの多様な関わり方を理解し、豊かなスポーツライフへの見方・考え方を深めることができる。

① 生徒一人ひとりのスポーツへの主体的にスポーツへの理解を深める工夫

本単元を学習するにあたり、総合的学習の時間との連携を図り身近なスポーツへの関心と理解を深められるようにした。総合的学習の時間の大テーマを【「する」「みる」「支える」で考える富山のスポーツ・健康】と題し、そこから考えられる課題について生徒は小グループになり課題解決学習に取り組んだ。

生徒の取り組んだ小グループ課題例

「なぜ富山県民は走るのか(マラソンの流行)」

「富山県のプロスポーツはどのような工夫をしているのか」

「地域発祥のスポーツはなぜ生まれたのか(氷見市はんぎょボール)」

「eスポーツは本当に普及しているのだろうか」

「富山県の体育施設はどのように活用されているのか」

総合的な学習の時間と連携することにより、書籍やインターネットの情報だけでなく、できるだけ直接聞いたり、体験したりする機会を多くもつことができる。それは、本単元の本質に迫るために必要不可欠な「実体験から得た自分の意見」をもつことに直結し、自分自身のスポーツライフについて多面的な見方・考え方をもつための素地となるものと考えている。

氷見市スポーツ振興課さん協力のもと「はんぎょボール」体験学習



県庁スポーツ振興課での調査活動



富山グラウジーズ代表高堂さんのお話



富山eスポーツ連合会長堺谷さんのお話



富山グラウジーズの試合観戦



ポスターセッションによる学びの発信・共有



一人一人が、運動・スポーツに対する「多様な見方・考え方」をもてるようにする。

② スポーツとの多様な関わり方の理解を深めるための工夫

問いの工夫

生徒は、総合的学習の時間での学びや個々の運動経験から、スポーツには【する】以外にも、【みる】【支える】といった多様な関わり方があることに気付いている。

しかしながら、それら多様なスポーツとの関わり方は理解できても、それらが互いに影響し合うことで、「豊かなスポーツライフ」になることまでは、理解しているとは言い難い。そこで、【する】【みる】【支える】の関わり方についての意見が出た後、「【する】人にとったら【みる】人がいなくても【する】ことはできるのでは？」と問う。生徒らは、「見る人がいるから、やる気もあがる」「もしプロなら、見る人がいてこそそのもの」という必要性を求める意見が出てくる。

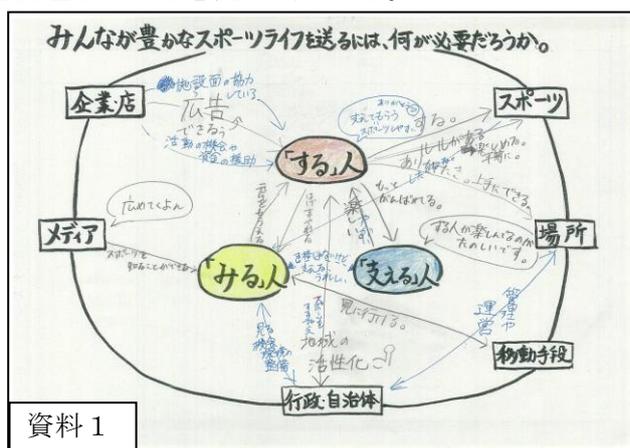
このような、問いのやり取りを糸口に、スポーツへの多様な関わり方には、それぞれの立場が関わり合っていることに目を向けさせるようにした。

主体的・対話的な学びのための工夫

さらに「そんな風に考えると、もっとたくさんの方が関係が見えてきそうです。ペアで相談しながら探してみましょう。」と投げかけ、豊かなスポーツライフのためのスポーツとの関わり方への理解が深まるようにした。ここでは、資料1のワークシートに直接書き込む活動を通して、生徒が主体的・対話的に学習を深められるよう配慮した。

学びの深まりを確かめる工夫

学習の振り返りでは、敢えて前時と同じ学習課題について、自分の考えを書かせるようにした。こうすることで、本時での学びの深まりに生徒自身が気付くことができると考えた。資料2の生徒は、「みんなが豊かなスポーツライフを送るには何が必要だろうか」という課題に対し、自分の考え方の変化に気付くことができています。これらの振り返りでの生徒の変容は、そのまま指導と評価にも生かすこともできる。



資料1

学習課題「みんなが豊かなスポーツライフを送るには何が必要だろうか」について、改めて、あなたはどうか考えますか？

私は、最初聞かれた時は、場所、ゆるスポなどのように単体で例をあげていました。でも今日の授業を通して、何かがあるだけじゃなく、もの通しが関わりあうことが一番重要なのではないかと考えました。バスがあれば便利だけど、そこに行政が加わって「エコマイカでお得」というシステムができれば、みんなの心もおサイフも豊かになると思います。また、する人と支える人が、お互いを尊重したり感謝したりすることで心は豊かになると思うし、する人とみる人もはげましあうことで生きがいづりになると思います。

資料2

(3) 成果と課題

- 総合的な学習の時間との連携を図り、生徒一人一人に共通の運動体験やスポーツに対する課題意識や知識をもたせた状態で、体育理論の学習を行うことにより、より主体的で対話的な深い学びにすることができた。
- 体育理論の高等学校までのカリキュラムを見通した上で、中学校1年生で「豊かなスポーツライフ」を念頭においた学習をすることで、今後の体育理論学習の素地を築くことができた。
- 多様なスポーツとの関わり方を知るだけでなく、それぞれの関連性に目を向けさせることで、「豊かなスポーツライフ」の理解を深めることができた。
- △ 本単元では、実生活に生かしたり、今後の自分のスポーツライフを設計したりするという段階ではないため、例えば、部活動や体育的行事などと関連させて、できるかぎり学びを実感させる工夫が必要であった。